古田史学の会・東海　　平成28年

東 海 の 古 代

第192号　2016年08月

会長　：　竹内　強　　副会長・発行　：　林　伸禧
編集　：　石田敬一　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

第28回愛知サマーセミナー2016

本会の７月例会に代えて、平成28年7月17日(日)の「第28回愛知サマーセミナー」において、**東海学園高等学校２号館３階104教室で、３限目と４限目に**講座を開きました。

３限目（13時10分～14時30分）では当会の竹内強会長の挨拶・講座開設の趣旨説明のあと、古田史学の会の代表古賀達也氏を招き「教科書が書けない本当の古代史　邪馬台国の真実」と題して講演いただき、４限目（14時50分～16時10分）では当会の石田敬一、林伸禧の両会員により、それぞれ「教科書が教えない古代年号」、「教科書が教えない推古紀の真実」と題してゼミを行いました。なかなかの盛況で、いくつかの質問に答えるため、時間をやや延長して16時30分ごろに終了しました。実参加者数は、３限目に続き４限目も受講された方があり50名程度で、中学生から70代まで幅広い年齢層の方々で教室はほぼ満席となりました。昨年までの参加者に比べ、学生や女性が多かったようです。聞き手の状況が多様であることと参加者からいただいた感想を参考にすると、来年も引き続き、通説の疑問点など基本的なテーマを中心にわかりやすい内容とすることが重要であると思います。講座の様子の写真と参加者の感想文を載せます。

竹内会長の挨拶･趣旨説明

古田史学の会代表　古賀達也氏の講演

４限目の様子

＜感想文＞

中学校１年

私は「ヤマタイ国」ではなく「ヤマイチ国」であったことにとても驚きました。そして、その王国が九州にあった可能性があったということにも驚きました。私はこの講座を受けるまでこの王国は近畿地方にあるものだと考えていたので少しだけ疑いました。韓国からの距離や鉄の出土量、絹の出土など、どのように説明を聞いても近畿ではあり得ません。

これから自分でも、もっと調べてみたいと思います。

高校１年

僕は今日のこの講座を受けて環境問題や日本の歴史について世の中に出回っていることと真実では差があるんだなあということがわかり、びっくりしました。例えば邪馬台国は九州に在るのであって奈良にあるという考えは間違っている。計算すればすぐ解ける、これには僕はびっくりしました。これからは、ウソか？まことか？いろいろなことについて調べていきたいと思います。

高校１年

この授業を聞いて昔の技術を研究をして今に生かしていることを学び、そしてなによりも邪馬台国が邪馬壹国だったこと、そしてその場所が奈良県ではなく福岡県ではないかということに驚きました。その理由を聞いて納得できることだと思いました。

高校１年

今まで、自分が小中で勉強したときは，都が京都や奈良に多かったことから、大和説と考えていたが、鉄の産出量や距離などさまざまな根拠があり、本当の真実を知ることが出来たのでよかった。

高校１年

一番最初の昔の染色の技術が最先端技術に使われているというのはすごいと思った。邪馬台国の位置がかけ算ですぐ出てしまうのもすごかった。

年号の話は少し難しいと思った。でも、少し気になるので自分で調べてみようと思った。

高校１年

僕はこの話を聞いて、教科書で教える歴史にはウソが多いのだということがわかりました。今まで僕は、歴史の勉強は、教科書に書かれてた内容を覚えるだけのつまらない科目だと思っていたのですが、この講座で正しいことが何かを考えるというのが歴史学の面白みなのだと思いました。

最近の大人たちは自分たちの利益のためだけにウソをついたりしているという現実に対して寂しさを隠せません、そういう大人と闘うためにも、こういった考え方を取り入れたいです。

高校１年

今まで習ってきた日本史は間違っていたのだと聞いて驚きました。しかも、邪馬台国なんて高校一年のどショッパツで習うものなので記憶にも残っています。この前、学校で九州説と近畿説があるんだよと教科担当の先生が話していたのを思い出しました。先生もたしか九州ではないか？と話していた気がします。そのときはへーとしか思わなかったけど今日の講座を聴いて衝撃でした。名前も違ったといっていたし、場所についてもいわれてみれば確かにってなりました。今日の話を聞けてよかったです。とても興味深かったし、おもしろかったです。ありがとうございました。

高校１年

最初の方は、邪馬台国と関係ない「色」に関する話だったが、紫色は椿の灰でつくるという話など知らないことだったのでためになったと思いました。また、邪馬台国の話では、小学生レベルのかけ算で邪馬台国の場所がわかるというのはとても驚きました。また、「邪馬台国」ではなく「邪馬壱国」ということが分かり友人に教えてあげようと思いました。卑弥呼は、もしかしたら「ひみこ」ではなく「ひみか」かもしれないということを聞き驚きました。

今日は、ありがとうございました。とても勉強になりました。

高校１年

邪馬台国だけではなく、化学式や、最近問題となっているもののほとんどが嘘だということも聞けて、とても為になりました。邪馬台国の呼び名はなんとなく「ヤマト」に近いからヤマタイ国がヤマト国になったと聞いて、びっくりした。邪馬台国の位置は高校の化学知識であれば分かるということを聞いて、なぜ高校の化学知識で分かるのに九州に在るとか、奈良にあるとか社会の資料集に書いてあるのを思い出して、社会の教科書や資料集の信頼度がなくなった。

卑弥呼の子孫がいるのかどうか知れてよかった。卑弥呼の呼び方は「ヒミコ」より「ヒミカ」の方がいいと思った。卑弥呼の子供はいないが，一族の子孫がいることがわかり会ってみたいと思った。とても貴重な時間なりました。本当にありがとうございました。

高校２年

歴史学者の中に自分の説に都合がよくなるように改ざんをする人がいることに衝撃を受けました。他の話からも現代の「間違っていること」を考えさせられました。

邪馬”壹”国についてとても論理的で分かり易かったです。文書からの「位置」鉄や絹の出土分布などここまでの情報がそろっていながら結論が認められないことに怒りをを感じます。古田史学のますますの発展を強く願います。講義をありがとうございました。

高校２年

小学校から学んだ日本史の中の邪馬台国が「台」ではなく「壹」であったり北部九州に位置していたりと知らないことや、改めて考えないと思うことが多くあり、とても驚きました。今、教科書に載っていること以外にも知らないことが沢山あることが判ったのでもっと日本史など知っていきたいなと思いました。

とても楽しく、素晴らしい時間でした。ありがとうございました。

高校２年

連続講座とは気づかず3時限目は来られなくて残念だった。

教科書に書いてあることが正しいとは限らないことがわかった。

高校２年

年号だけでも学校で習う倍以上の量があることを知り驚きました。今まで学校で習うものだけだと思っていたのでその間にも全く聞いたことがない年号を知り、2017年に年号が変わるならば考えるのが大変だと思いました。紅葉の時期に豊田市によく行くのですが寺院があることを知らなかったし建てられた年号など注目したことなく何年としか学校でも覚えないので今後はもっと年号に注目していきたいと思いました。

小野妹子が遣隋使以外とは考えたこともなかったが，記事と本当のことが違うこともあるのだなと思いました。ちょうど今学期、日本史で隋や唐をやり知っている名前や知っている出来事があり分かり易く聞くことができ、また興味深く聞くことが出来ました。

高校３年

先日あった天皇退位で新しい年号に代わるとどうなるのか、また改めて年号には深い意味や思いが込められているのだと改めて思いました。

林さんの講義では「推古」と「推古紀」についてお話を聞きました。また、干支についても聞きました。私は18才の寅年です。実は今回の一学期期末テストの世界史は「ローマ帝国」「中国」「北方領土」で三国志は好きな話だったので楽しかったです。

高校３年

古代の年号は、初めて知りました。年号の読み方が難しかったです。年号はたくさんの種類があることがわかりました。神社などに年号が書かれているかもしれないなと思った

一般

以前より古代史に大変関心がありました。本日機会を得まして、目にウロコという感じです。

代学的観点も採り入れられ興味があり、宇宙の何万年に通じるものがありました。

一般
　まず理系の立場から歴史を見る、疑うという視点が非常に興味深かった。私も聖徳太子はいなかったと考えてきました。
一般
・邪馬台国の真実　化学的、科学的思考との関連を説かれ、わかりやすい説明でした。
　　最初に『魏志倭人伝』の版本の図と「邪馬壱国」の文字のところを表記すると分かり易かったのでは。
・古代年号　　大宝以前の年号の存在が良く分かりました。
　　これを作成した主体についてもう少し話してもらえれば良いのでは。
・推古紀の真実　　年号の繰り上げ、下げの操作がされているのが興味深かった。
一般
　子供の頃から父の本棚で古田武彦氏の本を見て何となく説の内容は知っていたのだが、今回のセミナーで本来の姿を知ることができて良かった。考古学は科学と遠い存在だと思っていたが、本来の学問としては科学的アプローチが必要だと改めて認識できた。
一般
　古代の染料の話が聞けるとは思いませんでした。
　邪馬壹国の里程問題で、最後の１万２千里を全行程の総和とせず、そのまま延長した説を読んだことがあります「科学的に」とわざわざことわって解説した書でした。
一般
　教科書で習ったことも年が経つにつれ変わっていくんだと思った。
　学会に反発して論文を発表する勇気がすごいと思った。
一般
　真実はシンプルということを改めて認識しました。
一般
　資料配付、ありがとうございました。帰ってゆっくり楽しみたいと思います。
　わたしも神社に足を運んだ際には年号探しをしてみたいです。

以上

拘奴国について　その２

名古屋市　　石田敬一

４　官職名＋名

　魏の使者・張政が倭國にやってくるのは、次の記事にあるとおり正始八年(247年）のことです。

　其八年、太守王頎**到官**。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和、遣倭載斯烏越等詣郡説相攻擊状。遣塞曹掾史張政等因齎詔書、黄幢、拜假難升米為檄告之。

　（正始）八年、太守王頎, 官に到る。倭の女王卑彌呼、狗奴國の男王卑彌弓呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、因って詔書、黄幢をもたらし、難升米に拜假（はいか）（拜仮）させ、檄をつくりてこれを告喩す。卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。

　この記事で問題となるのが倭載斯烏越です。載斯烏越は、載斯と烏越の二人の名であるとか、載斯烏越が一人の名であるというのが一般的な解釈です。スサノオであるという内藤湖南などの研究者もいます。中華書局版の『三國志』では「倭載斯、烏越」とされ、載斯と烏越の間が句読点で区切られており、二人の名と考えているようです。また、先師古田武彦は明確にはしていませんが、「倭載・斯烏越」に区切られ、倭載と斯烏越の二人であると考えておられたよう

です。(『倭人伝を徹底して読む』ミネルヴァ書房、2010年、166頁)

私は、これらの解釈はどれも違うと思います。この記事に出てくる官職名や人名をどのように理解すべきでしょうか。

この記事の最初に出てくる人名は、太守王頎(オウキ)です。太守王頎(オウキ)は、各地の太守を歴任した魏の武将です。字名を孔碩(コウセキ)といい、『三國志』を始め『後漢書』『旧唐書』等では王頎(オウキ)と呼ばれます。つまり、太守王頎は、「官職名の太守」＋「名の王頎」で構成されています。

この表記のルールに従えば、女王も広い意味での官職名ですから、倭女王卑彌呼は、「倭の女王という官職名」＋「名の卑彌呼」です。狗奴國男王卑彌弓呼についても同様に「狗奴國男王という官職名」＋「名の卑彌弓呼」です。

このように“官職名＋名”と表記することを追認するのが、次の、塞曹掾史(さいそうえんし)張政です。張政は、帯方郡太守である王頎の部下の武官です。そして、塞曹掾史は肩書きです。

塞曹掾史の意味について明確に答えた文献は無いようですが、私は次のように考えます。曹掾史は、『後漢書』などに「諸曹掾史」「兵曹掾史」「部戸曹掾史」などとして「曹掾史」が共通します。曹掾史の「曹」は役人、「掾史(えんし)」は専門官のことです。すなわち役人の肩書きです。塞は、「ふさぐ」という意味ですから、塞曹掾史は守りを固める役割を持った専門官ということになろうかと思います。

したがって、塞曹掾史張政は、明らかに「塞曹掾史という官職名」＋「名の張政」で構成され、塞曹掾史(さいそうえんし)張政は、“官職名＋名”で表記されているのです。

最後に、難升米については、この記事にはありませんが、先に「景初二年六月，倭女王遣大夫難升米等詣郡」の記事があり、大夫**難升米とされますので、**「官職名の大夫」＋「名の難升米」です。やはり、大夫**難升米も**“官職名＋名”で表記されています。

となると、いま問題としている倭載斯烏越(うごし)については、その解釈が分かれてきたところですが、「倭の載斯という官職名」＋「名の烏越」とするのが必然です。“官職名＋名”の表記のルールに従えば、倭載斯烏越が一人か二人かなどの解釈が分かれるような問題とは私には思えません。倭載斯烏越は、載斯と烏越の二人を意味しているのではなく、また載斯烏越という一人の名を表しているのでもありません。これは“倭の官職名＋名”です。わざわざ頭に倭が付されているのは、直前に狗奴國男王が記述されるので、狗奴國の官吏と区別するためです。

以上のことから、倭載斯烏越は倭の載斯の肩書きを持つ烏越(うごし)であり、烏越(うごし)が名になります。

5　本名・字名と尊称・称号

生まれたときに親がつける本名(諱(いみな))、そして成人したときに本人若しくは目上の者がつける字名（字(あざな)）に対して、王や貴人などは、死後には、諡(おくりな)に代表される尊称や称号で呼ばれます。これは生前の功績を称える名称であり、日本の歴代の天皇もそうであるように死後の本人を呼ぶ名として諡が使われます。先代の天皇の本名は裕仁(ひろひと)で、諡は昭和天皇です。

たとえば、孔子は、姓が「孔」、名は「丘」ですので、本名は「孔丘」とされます。字名は「仲尼」です。孔子の諡は「文宣王」であり、死後にはその名で呼ばれたほか、敬意を表するために様々な封号が贈られますが、後代史料には一般的には尊称の「孔子」で称されることが多いようです。「孔子」の「子」は先生という意味があるので、本名（実名）や字名に対して、こうした美称が使われているのでしょう。

孔子の表記のルールに従えば、卑彌呼は、美称ということになりますが、卑弥呼は女王ですので、後代史料に本名や字名(あざな)で表記されることはありえず、諡(おくりな)などの尊称・称号で表記されていると考えるのが妥当でしょう。とりわけ、卑彌呼は女王ですから、卑彌呼の名は先ず間違いなく、生前の事績を評価してその人を尊び贈られた称号である諡であると私は思います。

ところで、古田武彦氏は、上表文には自署名があるはずで、その自署名が『魏志』倭人伝に書かれているとされます。私も上表文には自署名があるだろうと推測しますが、必ずしも『魏志』倭人伝に採用されたのがこの自署名であるとは限りません。とりわけ王の場合は、死者を本名で呼ぶことを避ける慣習がありますので、『魏志』倭人伝の記事の中で、本名を記載したとは思われません。記事にその王の名を示すとすれば、生前の事績を評価して付けられた諡（贈

り名）などの尊称・称号で記載されたにちがいないでしょう。したがって、卑弥呼は、諡などの尊称・称号であると私は考えます。

６　卑彌呼機関説

さて、“記紀いっぱつ”さんから「歴史読本2014年7月号」（株式会社KADOKAWA）に遠藤美都男氏の卑弥呼機関説が載っていると、私のブログにコメントをいただきました。ご教示いただいた「歴史読本」の78頁において、遠藤氏は、小見出し「卑弥呼は個人名ではない」として、卑弥呼は「ひみこ」又は「ひめこ」「ひめみこ」の音を写したものであり、卑弥呼は称号であるとされます。一般的には卑弥呼は人の本名（実名）であるとされる考えに対して、尊称・称号であると捉えたところは私と同じ考えです。しかし、発想の根幹は私の考えとは違います。

遠藤氏は、卑弥呼は倭人の発音を聞き取って音訳したもので、卑弥呼の発音は「ひめ＋みこ」の可能性が高く、「ひ」は特殊な霊能力を保持する人を意味する音であり個人名ではないから称号であるとの主張です。ただし、倭人の発音を聞き取って音訳したとする根拠を示されていませんし、「ひ」は特殊な霊能力を保持する人を意味する音かどうかについても根拠を示されていません。この遠藤氏の主張の詳細については、『卑弥呼誕生』（洋泉社、2001年）にあります。遠藤氏はこの著書の中で、「卑弥弓呼」は「卑弓弥呼」の誤写で「ヒコミコ」すなわち「ヒコ（彦）＋ミコ（御子）」であり、実名ではなく尊称だとするに至ります。さらに、この自らが造った根拠を基にして卑弥呼は「ヒメ（姫）＋ミコ」の可能性が大であると言及するに至っては、あまりにも我田引水であると思います。卑弥呼は倭国の女王の本名（実名）と信じて疑わない傾向に対して警笛をならしているところは共感しますが、文字の持つ意味に関して一切言及されないのは不信です。

卑弥呼は、尊称・称号である可能性が高く、その使われた漢字の意味するところが重要であると私は考えます。

７　文字使い

卑彌呼の文字のうち「卑」の文字については注意しなければなりません。『魏志』列伝には卑彌呼とありますが、「卑」は蔑（さげす）む文字で「卑しむ」の意味です。これに対して『魏志』帝紀では俾彌呼とあります。本来の文字は、俾彌呼と思われます。俾は「…させる、したがう、つかさどる」という意味で、そして、彌は「月日を経る。広く行きわたる。ほころびをつくろう。おぎなう。」で、呼は「よぶ。呼びかける。呼びよせる。」の意味です。したがって、俾彌呼は「ほころびを繕うようつかさどり呼びかける」という意味が込められているのではないかと思います。

大乱の後をとりまとめた俾彌呼の事績にまったく相応しい称号であると思います。俾彌呼は諡（おくりな）であって、生前の事績を評価して贈られた尊称・称号であると考えます。

「俾」については、官名の「卑狗」の「卑」にもあてはまると思います。「卑狗」の「卑」は先に示したとおり「卑しむ」の意味であり、また、「狗」も「犬。卑しい」の意味です。つまり「卑狗」は、両方とも卑しい意味を持つ文字ですから、明らかに卑下するように文字を選んでいます。

官名の「卑狗」の「卑」が「俾」であるならば「つかさどる」意味ですから、官名として相応しいと思います。「卑」は「俾」の人偏を省略し、卑しい文字にしたと考えるべきでしょう。

また、「卑狗」の「狗」については、『魏志』倭人伝に「狗奴國」とあった文字を『後漢書』東夷伝では「拘奴國」に修正していますから、本来、「狗」は「拘」であって、「こだわる。かかわる。仕事に携わる。従事する。」意味ではないかと思います。

つまり「卑狗」は「俾拘」であって、これを両字ともに卑しめる文字に置き換えたということです。「俾拘」であるならば「司る仕事に携わる」という意味であって、倭國が官名として採用するのに適切な文字であると思います。

となると、テーマである「狗奴國」の文字使いはどうでしょうか。「狗奴國」の文字は、「狗」は「卑しい」の意味で、奴が「やつら、やっこ、しもべ」で他人を卑下する意味ですから「卑しいしもべの國」という卑しめた名称になります。しかし、先述のとおり「狗」は「拘」に書き改められており、「こだわる。かかわる。仕事に

携わる。従事する。」の意味です。また、「奴」は、「俾」が人偏を省略して「卑」にしたのと同様に、本来は「伎」であって、その人偏が省略され卑しめる文字に表記が変更されたのではないかと思われます。とすれば、「狗奴國」の本来の表記は「拘伎國」であって、もし、そうであるならば、「伎」は「つとめる」という意味であるので、「拘伎國」は「こだわりつとめる國」ということになり蔑む意味がなくなるでしょう。

いずれにしても、これらの人名や国名の文字使いは、発音を変えずに、卑しめた文字に変えられていると思われますので注意が必要です。卑しめた文字に変えられたということは、とりもなおさず、卑弥呼や狗奴國は、中国の官人が聴き取って、ヒミコやクナの音を充てたのではなく、その文字の持つ意味を認識しつつ倭國側が選んで使っていたことを示しているのだと考えます。そして、当然、中国側は、『三國志』夷蛮伝の中では、倭國側が示した文字では、華夷思想（中華思想）からよろしくないので、この思想に基づき、倭國の人名や国名などについてよく似た字形で同音の文字の蔑んだ意味を持つ漢字に変えたということでしょう。

８　「拘伎國」の読み

さて、「拘伎國」を何と読むかです。

「狗奴國」であれば、通説のように「クナ」と読むことも可能であるものの、前回の会報誌で述べたように「狗」は「卑狗」に使われていますので、これを彦とすれば「狗」は「コ」の可能性が高いとして、「狗古智卑狗」の「狗古智」を仮に「ココ*チ」としました。

「拘」は「コウ」の音しかないので、「狗」と「古」の音が微妙に異なっていたのではないかという疑問点が解消され、「狗古智卑狗」は「拘古智俾拘」であることから「コウコチヒコウ」と読んだのではないかと推測されます。

そして「拘伎國」の「伎」には「ナ」の音はなく「ド」の音のみですから、「拘伎」は「コウド」と読むと私は思います。

古代逸年号（１）

瀬戸市　　林　伸禧

はじめに

古田武彦氏が唱える「九州王朝」の存在を証明するひとつに「九州年号（古代逸年号）」がある。私は、その存在を証明するため、古代逸年号を採集している。

現時点（平成28年８月１日）までに、古代逸年号が記述されている年代記類80本余[*1]、及び個々の古代逸年号延3,500個余[*2]を収集した。その状況は、別紙１「古代逸年号(年代記類)文献一覧・古代逸年号採集状況」を参照されたい。なお、これらは史料批判をせず、文献に記載されているのを採集したものである。

古代逸年号は、北は青森県から南は鹿児島県まで４２都府県[*3]から採集した。

この採集結果をふまえ、現在まで判明したことを報告する。

これらを別冊『古代逸年号』として取りまとめており、順次発表する。

１　作成上基本的事項

(1)　古代逸年号の定義

「九州年号」と称するのが一般的であるが、次の事由から「古代逸年号」と称する。

- 古代（「大宝」以前）に使用された年号であること。
- いわゆる正史から排除された年号（逸年号）であること。
  なお、「大化・白雉・朱鳥」年号は『日本書紀』編纂上掲載されたものと解する。
- 九州王朝以外で用いられた思われる年号も見受けられること。

(2)　古代逸年号は実在した。

古代逸年号は、通説では『日本書紀』に掲載されている「大化、白雉、朱鳥」以外は認められていないが、実在したと思っている。

詳しくは、別冊『古代逸年号』を参照されたい。

---

*1　年代記類８０本　：山形県から鹿児島県の１７都府県、及び朝鮮・中国・ポルトガル。
*2　延３，５００個余：神社等の縁起は様々な文献に掲載されており、重複していたとしても文献に掲載されている古代逸年号をすべてを採集した。
*3　４２都府県：４７都道府県中、北海道・沖縄・岩手・新潟・鳥取県が未確認である。

(3)　年代記類について

年代記類（一般に年代記、皇代記と称されたもの、および古代逸年号が年代記に準じて記述されている文献を含む。）を大別すると、継体紀（善記・継体）から文武紀（大長・大化）まで継続して存在する『二中歴』型と、『日本書紀』記述されている「大化、白雉、朱鳥」のほかに「白鳳、朱雀、大化（孝徳紀での大化以外。）」を記述されている『簾中抄』型、及びこれらの混合型に大別される。

その分類は次のとおりにした。詳細は別紙２「類型区分」参照されたい。

①　第１系年号

年代記類が、「継体紀～文武紀」に記述されているのを「第１系（二中歴型）年号」とする。

②　第２系年号

年代記類が、「孝徳紀」及び「天武紀・持統紀・文武紀」に記述されている年代記類を「第２系（簾中抄型）年号」とする。

③　第３系年号

第１系年号と第２系年号とが混在して記述されている年代記類を「第３系年号」とする。

④　第４系年号

古代逸年号が部分的に記述されており、①～③に類型区分出来ない年代記類を「第４系年号」とする。

⑤　第５系年号

逸年号の表示方式が辞書方法で記述されている年代記群[*1]。

⑥　第６系年号

年代記として疑問があり、慎重に取扱うべき年代記類。

なお、年代記類の古代逸年号は、一本（表１参照）を除いて大宝年号までで終わる。

２　その他留意事項

採集したところ、次のような事項が判明した。詳細は別冊『古代逸年号』参照されたい。

(1)　『日本書紀』暦と一年ずれている古代逸年号がある。

・『万葉集』、『皇年代私記』等に掲載されている古代逸年号

(2)　第１系年号と第２系年号の「白雉、白鳳、大化」年号が重複している。

(3)　干支が不整合な事例がある。

古代逸年号が記述してある文章で、６０干支として存在しない干支(壬酉)、十干・十二支が重複(辛巳・亥丑)、十二支のみ（申）記載、及び干支のみで年数が未記載の事例がある。

このような記述がなされたのは、本来、『二中歴』に代表される年号（第１系年号）が記述されていたが、書写者は『簾中抄』に代表される年号（第２系年号）しか承知してなく、折衷案として記述したと思われる。

(4)　写本により古代逸年号の記述に異同がある。

・『運歩色葉集』における静嘉堂文庫本と元亀二年京大本

・『甚目寺縁起』における文永元年（1264年）本と承応元年（1652年）本

(5)　写本によっては、古代逸年号の記述に多寡がある。

・『正法輪蔵（聖法輪蔵)』

(6)　誤書写した底本（内閣文庫本）を基に出版した書物がある。

・日本随筆大成〈第三期〉１３『塩尻』おける「皇代記抜抄」（表２参照）

・『随筆 塩尻』（帝国書院刊）等

古代逸年号を見つけたよ

名古屋市　　石田敬一

愛知県の知多半島に阿久比町があります。

阿久比町は東に半田市、西に知多市が隣接しており、知多半島では唯一海に面していない町です。知多半島のほぼ中央に位置する阿久比町の中心地である阿久比町役場の南、名鉄河和線阿久比駅の西に、阿久比神社があります。

阿久比神社は、まさに知多半島の中心地とも言うべき場所に鎮座しています。

*1　第５系年号：年号は第１系であるが、改元時期、使用期間が記載されていない。

阿久比町教育委員会の看板には、下線で示したとおり顕宗２年に創建され、大化４年に猿田彦大神などを合祀したとあり、「大化」年号が記載されています。

なお、祭神の開 嚼 神は、『日本書紀』に記述され、伊弉諾神が黄泉国から脱出した際に投げた褌から生まれた神ですから伊弉諾神の分身ということになります。

阿久比神社

阿久比神社は、延長5年（927）『延喜式巻九』神名帳に知多三座の一つとして記され、貞治3年（1364）『尾張国神名帳』には「従二位上英比天神」と記されている。

社伝によれば、第23代顕宗天皇2年に「開嚼神」を祭り、創建されたと言われ、大化4年（648）に「猿田彦大神・天津彦命・瓊瓊杵尊」を合祀した。その後、天平神護元年（765）「八幡大神・田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命」を合祀した。

延喜20年（920）英比丸（麿）が社殿を造営し、60間四方の社地を寄進した。没後、天徳3年（959）「英比丸命」として合祀された。長暦4年（1040）に拝殿が建立された。拝殿は幾度かの改築を繰り返し、平成9年度に現在の拝殿が完成された。

阿久比神社は、俗称、尾張知多郡の「一宮」と呼ばれているが、これは式内社として知多三座の初めにあげられているからである。明治9年（1876）に「郷社」、明治40年（1907）10月に「神饌幣帛料供進指定神社」となった。

阿久比町教育委員会

阿久比神社は、延長５年（９２７）『延喜式巻九』神名帳に知多三座の一つとして記され、貞治３年（１３６４）『尾張国神名帳』には「従二位上英比天神」と記されている。

社伝によれば、第２３代顕宗天皇２年に「開嚼神」を祭り、創建されたと言われ、大化４年（６４８）に「猿田彦大神・天津彦命・瓊瓊杵尊」を合祀した。その後、天平神護元年（７６５）「八幡大神・田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命」を合祀した。

延喜２０年（９２０）英比丸（麿）が社殿を造営し、６０間四方の社地を寄進した。没後、天徳３年（９５９）「英比丸命」として合祀された。長暦４年（１０４０）に拝殿が建立された。拝殿は幾度かの改築を繰り返し、平成９年度に現在の拝殿が完成された。

阿久比神社は、俗称、尾張知多郡の「一宮」と呼ばれているが、これは式内社として知多三座の初めにあげられているからである。明治９年（１８７６）に「郷社」、明治４０年（１９０７）１０月に「神饌幣帛料供進指定神社」となった。

（阿久比町教育委員会）

例会の予定

■ 今月の例会

(1) 日 時 ８月２１日(日) 13:30～17:00
(2) 場 所
　名古屋市市政資料館 第５集会室
　名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
(3) 参加料 500円 （会員は不要）
(4) 交通機関
・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
・市バス「清水口」、南西徒歩８分
・市バス「市役所」、東徒歩８分
(5) 駐車場 市政資料館：12台＋α収容(無料)

■ 総 会

例会の後に総会を行います。

■ 来月以降の例会日

９月18日(日)、10月16日(日)

■ 次の会報誌への投稿締め切り

８月３０日(火)

投稿先：furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を20部用意ください。

＜参考資料＞

表１　　**第１系Ｉ型年号（略年代記『本阿弥銘尽』）**

西暦		和暦		略年代記			二中歴				期間差
年数	干支	年号	歳	年号	干支	通期	年号	干支	通期	異	
517	丁酉	継体	11	―	―	―	継体	丁酉	5		
522	壬寅		16	善記	壬寅	4	善記	壬寅	4		
526	丙午		20	正知	丙午	5	正和	丙午	5		
531	辛亥		25	教到	辛亥	5	教到	辛亥	5		
536	丙辰	宣化	1	僧徳	丙辰	5	僧聴	丙辰	5		
541	辛酉	欽明	2	明要	辛酉	１１	明要	辛酉	１１		
552	壬申		13	貴楽	壬申	2	貴楽	壬申	2		
554	甲戌		15	法清	甲戌	4	法清	甲戌	4		
558	戊寅		19	兄弟	戊寅	1	兄弟	戊寅	6	1	
559	己卯		20	蔵知	己卯	5	蔵和	己卯	5		
564	甲申		25	師安	甲申	1	師安	甲申	1		
565	乙酉		26	知僧	乙酉	5	和僧	乙酉	5		
570	庚寅		31	金光	庚寅	6	金光	庚寅	6		
576	丙申	敏達	5	賢補	丙申	5	賢称	丙申	5		
581	辛丑		10	鏡常	辛丑	4	鏡当	辛丑	4		
585	乙巳		14	勝照	乙巳	4	勝照	乙巳	4		
589	己酉	崇峻	2	端政	己酉	5	端政	己酉	5		
594	甲寅	推古	2	造貴	甲寅	7	告貴	甲寅	7		
601	辛酉		9	願轉	辛酉	4	願轉	辛酉	4		
605	乙丑		13	光先	乙丑	6	光元	乙丑	6		
611	辛未		19	定居	辛未	7	定居	辛未	7		
618	戊寅		26	倭景	戊寅	5	倭京	戊寅	5		
623	癸未		31	仁王	癸未	6	仁王	癸未	１２		－6
629	己丑	舒明	1	聖徳	己丑	6					＋6
635	乙未		7	僧安	乙未	5	僧要	乙未	5		
640	庚子		12	命長	庚子	7	命長	庚子	7		
647	丁未	大化	3	常色	丁未	5	常色	丁未	5		
652	壬子	白雉	3	白雉	壬子	9	白雉	壬子	9		
661	辛酉	斉明	7	白鳳	辛酉	２３	白鳳	辛酉	２３		
684	甲申	天武	13	朱雀	甲申	2	朱雀	甲申	2		
686	丙戌	朱鳥	1	朱鳥	丙戌	9	朱鳥	丙戌	9		
695	乙未	持統	9	大化	乙未	6	大化	乙未	6		
701	辛丑	大宝	1	大長	辛丑	9	大宝	辛丑	3		＋6
704	甲辰	慶雲	1				慶雲	甲辰	4		－4
708	戊申	和銅	1				和銅	戊申	2		－2
類型				第１系Ｉ型			第１系Ⅲ型				±0

※

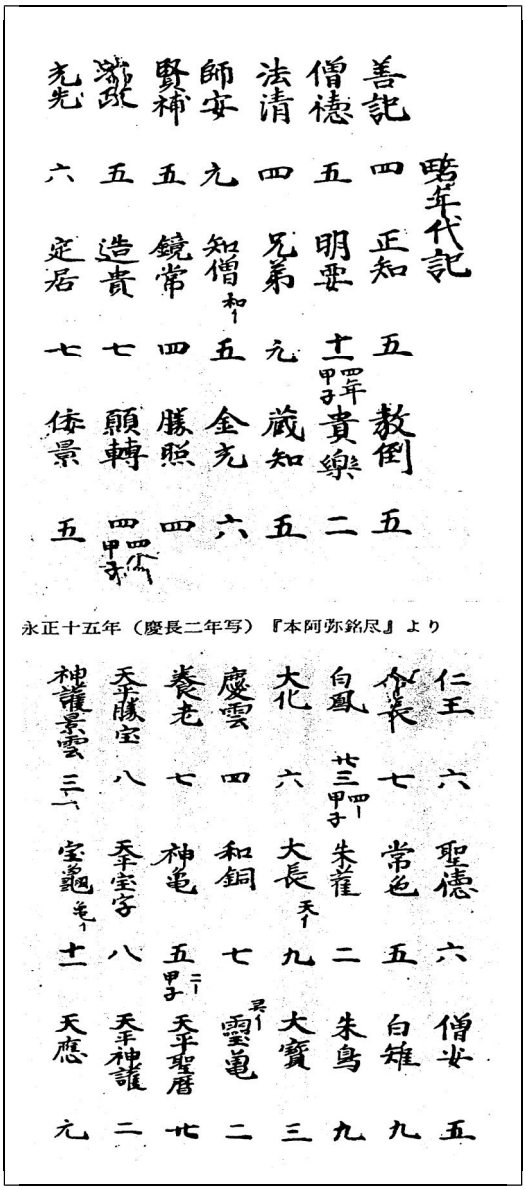
1　「年号・年数」のみの記述であるが、「明要十一 四年甲子」（明要四年甲子）・「白鳳廿三 四一甲子」（白鳳四年甲子）から元年干支を算出した。

2　「大長」年号の使用期間が「大宝･慶雲･和銅」年号の使用期間と重複している。

3　年号の異説

・「知僧」→「和僧」

・「大長」→「天長」



永正十五年（慶長二年写）『本阿弥銘尽』より

「刀剣美術」３８４号（昭和６４年１月）18頁

表２　『二中歴、如是院年代記』と皇代記抜抄（『塩尻』）の年号・干支比較表

西暦		和暦		二中歴				如是院年代記 本文				皇年代抜抄 本文				備考	
年数	干支	年号	年数	年号	元年干支	通用期間	異	年号	元年干	通用期間	干支ｺｰﾄﾞ	年号	元年干支	通用期間	干支ｺｰﾄﾞ	干支相違点	その他
517	丁酉	継体	11	継体	丁酉	5		―	―	―		―	―	―		丁酉：３４	
522	壬寅		16	**善記**	**壬寅**	4		**善記**	**壬寅**	4	**３９**	善記	**壬子**	4	**４９**	子×寅	
526	丙午		20	正和	**丙午**	5		正和	**丙午**	5	**４３**	正和	**丙子**	5	**１３**	子×午	
531	辛亥		25	教到	辛亥	5		教到	辛亥	5	４８	教倒	辛亥	5	４８		
536	丙辰	宣化	1	僧聴	丙辰	5		僧聴	丙辰	5	５３	僧聴	丙辰	5	５３		
541	辛酉	欽明	2	明要	辛酉	１１		明要	辛酉	１１	５８	明要	辛酉	１１	５８		
552	壬申		13	貴楽	壬申	2		貴楽	壬申	2	０９	貴楽	壬申	2	０９		
554	甲戌		15	法清	甲戌	4		法清	甲戌	4	１１	法清	甲戌	4	１１		
558	戊寅		19	兄弟	**戊寅**	6	1	兄弟	**戊寅**	1	**１５**	兄弟	**戊子**	1	**２５**	子×寅	
559	己卯		20	蔵知	己卯	5		蔵知	己卯	5	１６	蔵和	己卯	5	１６		
564	甲申		25	師安	甲申	1		師安	甲申	1	２１	師安	甲申	1	２１		
565	乙酉		26	和僧	乙酉	5		**知僧**	乙酉	5	２２	知僧	乙酉	5	２２		
570	庚寅		31	金光	**庚寅**	6		金光	**庚寅**	6	**２７**	全光	**庚子**	6	**２７**	子×寅	
576	丙申	敏達	5	賢称	丙申	5		賢称	丙申	5	３３	賢称	丙申	5	３３		
581	辛丑		10	**鏡当**	**辛丑**	4		**鏡常**	**辛丑**	4	**３８**	鏡常	**辛巳**	4	**２８**	巳×丑	
585	乙巳		14	勝照	乙巳	4		勝照	乙巳	4	４２	勝照	乙巳	4	４２		
589	己酉	崇峻	2	端政	己酉	5		端改	己酉	5	４６	端正	己酉	5	４６		
594	甲寅	推古	2	**告貴**	**甲寅**	7		**吉貴**	**甲寅**	7	**５１**	吉貴	**甲子**	7	**５１**	子×寅	
601	辛酉		9	願轉	辛酉	4		願轉	辛酉	4	５８	願轉	辛酉	4	５８		
605	乙丑		13	光元	乙丑	6		光充	乙丑	6	０２	光永	乙丑	6	０２		
611	辛未		19	定居	辛未	7		定居	辛未	7	０８	定居	辛未	7	０８		
618	戊寅		26	倭京	**戊寅**	5		和景縄	**戊寅**	１１	**１５**	景縄	**戊子**	5	**１５**	子×寅	
623	癸未		31	仁王	癸未	**１２**						仁王	癸未	6	２０		
629	己丑	舒明	1					聖徳	己丑	6	２６	聖徳	己丑	6	２６		
635	乙未		7	僧要	乙未	5		僧要	乙未	5	３２	僧要	乙未	5	３２		
640	庚子		12	命長	庚子	7		命長	庚子	7	３７	命長	庚子	7	３７		
647	丁未	大化	3	常色	丁未	5		常色	丁未	１４	４４	位常光	丁未	5	４４		
652	壬子		3	白雉	壬子	9						白雉	壬子	9	５８		
661	辛酉	斉明	7	白鳳	辛酉	２３		白鳳	辛酉	２３	５８	白鳳	辛酉	２３			
684	甲申		13	朱雀	甲申	2		朱雀	甲申	2	２１	朱雀	甲申	2	２１		
686	丙戌	朱鳥	1	朱鳥	丙戌	9		大化	丙戌	6	２３	大化	丙戌	6	２３		
692	壬辰	持統	6					大長	壬辰	9	２９	大長	壬辰	9	２９		
695	乙未		9	大化	乙未	6										乙未：３２	
701	辛丑	大宝	5	大宝	辛丑	3		大宝	辛丑	3		大宝	辛丑	3			

※１　干支ｺｰﾄﾞ：「甲子（０１）～癸亥（６０）」とした。
２　『塩尻』の「教到」年号の期間及び「僧聴」年号の期間・元年干支は、「宣化天皇僧聴元年即位」及び「明要」年号の元年干支から推定した。
３　『二中歴』の「兄弟」年号の期間欄の（）書きは異説。
４　誤認状況　①　子・寅：「寅」の略字体「刀」を「子」書体と誤認した。
②　午・子：「午」の書写体を「子」の書体と誤認した。
③　牛・巳：「丑」の書写体を「巳」の書体と誤認した